

表紙モノ語り

ラクダの道具と装具

ラクダ用装身具（標本番号H229042）など



上羽 陽子

民博 文化資源研究センター

専門は民族芸術学、染織研究。インドを中心に牧畜を生業とする人びとの染織に関わるものづくりについて研究をしている。

ラクダは乾燥地帯を移動する人びとにとって、重要な動物である。自動車やトラックが登場する以前において、ラクダは運送用家畜として大切な役割をはたしてきた。

人はラクダに乗るため、ラクダに荷物をのせるため、大事なラクダを飾るため、さまざまな道具や装具を用いてきた。ここで紹介するラクダの道具と装具は、ヨルダン南部にくらすアラブ系遊牧民ベドウィンたちが使っていたものである。まず、荷物を運ぶための道具として、「振り分け袋」がある。振り分け袋は、ヒツジやヤギの毛を紡いで糸にして織られたものである。大きさは、房の長さなどとは

が、鞍の上から振り分けるようにかけ、左右の袋に荷物を入れて使用する。装飾としての房飾りは、四つ編みや糸を巻き付けるコイリング技法、または巧みに糸を撚り合わせて丁寧につくられている。ラクダの尻尾部分を覆う、「後部覆い布」も同様に、家畜の毛を用いて織られている。

男性は移動するとき、ラクダの鞍の上にまたがり、片足を鞍の一部分の取っ手に引っ掛ける。ラクダは歩く時に前後に揺れるため、想像以上に乗り心地の悪い動物である。しかし、ベドウィンの男性は、片足を鞍の取っ手に引っ掛けるだけで、両手を離してもバランスよく乗り続けている。この時に

足が当たる部分に革製の「足あて」を使用する。

これらの道具と装具は、今春リニューアルをした西アジア展示場で、再現展示としてラクダの模型の上に取り付けられている。また、これら以外にも、「腹帯」や「くつわ」などラクダにまつわる資料が展示されている。さらに、来館者がラクダの前を通る時、鳴き声が聞こえるという工夫も施されている。ぜひ、展示場に足をお運びいただき、ラクダの声を聞きながらじっくり道具や装具をみていただきたい。

